

シ ラ バ ス

クラスター	がん治療専門医養成系			
授業科目名	日本人に多い五大固形がんの診断と治療			単位数 1
担当教員	責任者	山本 雄造	教室	受講者に個別連絡
授業科目の概要 〔病理診断〕 日本人に多い5大固形癌（肺癌，胃癌，大腸癌，肝胆道癌，膵癌，乳癌）の各々の病理診断について，各臓器の特長，早期癌病変，病理学的予後因子，術中迅速診断，細胞診断を中心に概説する。病理医は癌の治療はできない。しかし，画像診断や分子生物学的検索が格段に進歩した現在においてもなお，固形癌の確定診断に病理診断は不可欠である。その理由として，臨床的に良悪性の鑑別が困難な病変の最終診断を下せること，癌が発見されたときや治療されたときの腫瘍の大きさ，進行度，組織型などが症例により異なり，術前術後の治療の指標となるべく様々な病理学的情報を臨床医に与えることが出来るからである。画像診断を含めた臨床診断との整合性を考慮して，病理学的に最終診断することも肝要である。 〔胃がん〕 本邦では，胃癌の頻度は常に上位を占める。胃癌の発生には，ヘリコバクター・ピロリ菌が深く関わっているが，発生の分子生物学的メカニズムの解明は，あまり進んでいない。治療法は，胃癌診療ガイドラインにより，ステージによる日常診療および臨床研究に適した治療法が多岐にわたって示されている。早期例を中心とした内視鏡治療，進行例では，定型手術の位置づけ，腹腔鏡手術の発達を中心に講義を行う。高度進行例ではTS1を中心とした化学療法が一般的になっており，胃癌における化学療法の現状を講義する。 〔結腸・直腸がん〕 近年の大腸癌の発生頻度の上昇は目覚ましい。大腸癌の発生はadenoma-carcinoma sequenceを示す症例を中心に遺伝子異常の解明が進んでいる。大腸癌の治療に関しては，内視鏡的治療や腹腔鏡手術の普及が目覚ましい。また，抗癌剤ではオキザリプラチンの導入，さらに分子標的治療薬の登場とトピックスが目白押しとなっている。また，海外では大規模なRCTが数多く進行しており，毎年新たなEvidenceが蓄積されている。本講義では，大腸癌治療の最前線を紹介する。 〔原発性肝がん〕 我が国の原発性肝がんの95%は幹細胞がんが占めている。かつて，手術治療と肝動脈塞栓療法以外には治療法が存在しないと考えられていた幹細胞がんも，画像診断の発達でいわゆる早期がんが数多く発見されるようになり，あわせてラジオ波治療の発展や化学療法の発達とともに，治療手段が多岐にわたるようになってきた。がんの進展度，背景肝の障害度をもとに治療法選択のガイドラインが発表されている。最近では肝移植も治療法の選択肢に加えられている。残りの5%の多くは胆管細胞がんである。同じ原発性肝がんでも手術の方法やその他の治療法の効果に大きな違いがある。患者全体像の中でどのような治療法を選択していくのかについて講義する。				

シ ラ バ ス

クラスター	がん治療専門医養成系			
授業科目名	日本人に多い五大固形がんの診断と治療			単位数 1
担当教員	責任者	山本 雄造	教室	受講者に個別連絡
〔肺がん〕 肺がんは1955年以降急激な勢いで増加し続けている。現在、男性では死因の第1位であり、その死亡数は男で1955年の6倍、女性で約5倍となっている。また近年がんに対する診断法や治療法が進歩してきているとは言え、肺がんは現在でも発見された十数%が治癒するにすぎない難治がんのひとつである。この講義では肺がん診療に重要な生物学的特徴を紹介するとともに、エビデンスに基づいた診断、化学療法、外科治療、放射線治療あるいは集学的治療に関して紹介する。また現時点では十分なエビデンスは得られていないが、今後注目すべき診断法や治療方法に関しても最新のデータを交えて講義する。 〔乳がん〕 乳がんは女性のがんの中で、最も発生頻度の高いがんであり、その発生率は年々増加している。年間およそ4万人が罹患し、生涯その3分の1の方が再発し、年間約1万人の方が死亡している。早期発見により根治率は上昇し、早期発見のための乳がん検診が死亡率低下に期待されている。また、治療は手術、化学療法、内分泌療法、放射線療法を個々人の病態に準じたオーダーメイドに近い、総合的な治療が行われている。この項では、乳がんの疫学、検診、診断法（超音波・マンモグラフィなど）、治療法について総合的に講義する。				